
神戸ナマナクラブでは、現地のNGO団体と連携して、地域に「コミュニティ・ライブラリー(ミニ図書館)」を創り、本に親しんでもらうことによって母子保健や環境衛生、生活改善、防災などの知識の普及に役立てようと2009年からモデル事業を始めました。

その手始めとして、現地で図書館の運営に当たるリーダー2人(ラドウさんとティナさん)を日本に招いて基礎研修を行うとともに、現地語に翻訳した絵本など約100点を贈りました。

そして、今年(2010年)には、会員を現地に派遣し、子どもたちに読書の楽しさを知らせながら2つの学校に絵本を贈るとともに、コミュニティライブラリー作りの準備を始めました。

首都アンタナナリブのアンブディニスティ小学校では、日本から絵本が届くということで、休み中にもかかわらず多くの子どもたちが学校に集まっていました。

この学校は、アンタナナリブ市内でも最も貧しい地域にある小学校。児童数は2300名(1年～5年)、1クラスは60名。教室は24。午前と午後の2部制。児童数の多さ、1クラスの人数の多さは驚きです。14%ぐらいの子だけが上の学校に行くそうで、これはマダガスカルの平均からしてもうんと低い数字です。

おそらく、絵本を見るのは生まれて初めてという子も多くいるだろうと思います。でも、絵本の読み聞かせが始まると、みんなが本を食いつくように見つめ、一言も聞き漏らすまいとしっかり話を聞いていました。子どもたちの真剣な表情を見てください。

たった1冊の小さな本でも、本の持つ大きな力を感じることができました。

今回届けた本が、少しでもマダガスカルの子どもたちの心の中に残るものになることを願っています。

運動場には、男女別にズラッと2列に並んだ子どもたち。全部で150人ぐらいいるだろうか。こちらの方を好奇心いっぱいの目で見てくる。緑のユニフォームを着ている子と着ていない子がいる。

あとで、校長先生に聞いたところによると、男女各60着ずつプレゼントされたものを、貧しい子から配ったという。まだ新しく、ユニフォームを着ているこの方が小ざれいに見える。私服の子どもたちは、そこまで貧しくないということになるが、かなり汚い服を着ている子も多い。この小学校は、タナ市内でも一番貧しい地域にある小学校ということが実感できる。



校長先生と挨拶をした後、この状態では、読み聞かせができないので、教室を開けてもらうことにした。夏休みということで、先生の姿はほかには後1人ぐらいしか見えなかった。

教室へ、まずユニフォームを着ている女子、そして、ユニフォームを着ている男子の順で入れられ、第1回の読み聞かせがスタート。まずは、校長先生が我々を紹介。いいこと、うれしいことを言われた時には拍手という約束になっているらしい。ここに来た目的を伝えると、一言言うたびに拍手。

いよいよ、読み聞かせ。読むのはラドウさん。ちょっと声が小さく聞き取りにくいのだが、子どもたちは静かに聴いている。大勢の目が小さい本の絵に集中している。





2回目は、ユニフォームを着ている男の子の残りど、ユニフォームを着ていない子。1回目より人数がはるかに多く、教室はすし詰め状態。まずは、ナマナクラブとここに来た目的の紹介。今回は、校長先生からの指導はなく、一言言うたびに拍手はなかった。でも、この方が自然かも…。

今回の読み聞かせは、ティナさん。はじめの話は、「大きなかぶ」繰り返しの部分が面白いのか、笑い声が聞こえた。本が2冊あったので、左右で2冊の本を開き絵を見せた。子どもたちは、話と絵に集中している。







読み聞かせが終わり、子どもたちが帰った後、校長先生に学校内を案内してもらった。
物置のような図書室の本は、100冊もなかった。





教室も、長机が並ぶだけの殺風景な部屋。もちろん電気もない。

